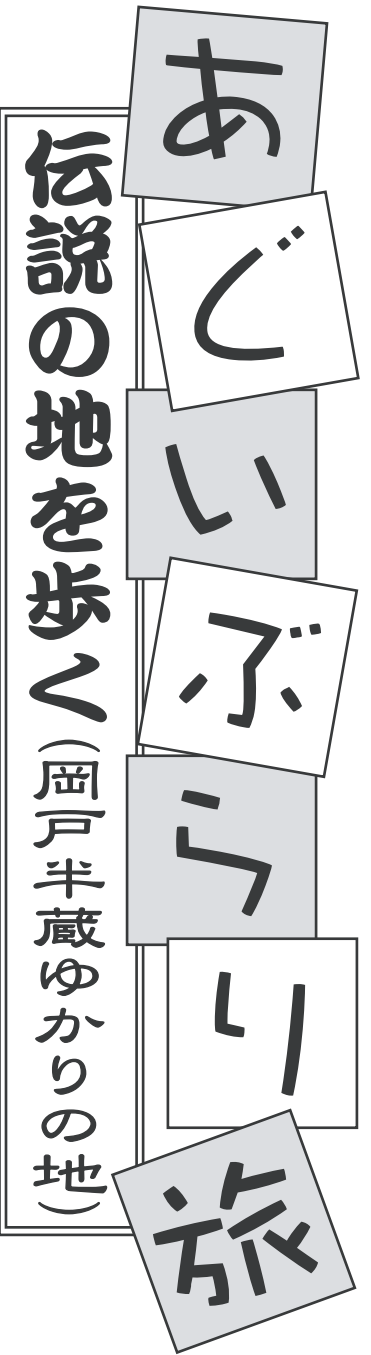
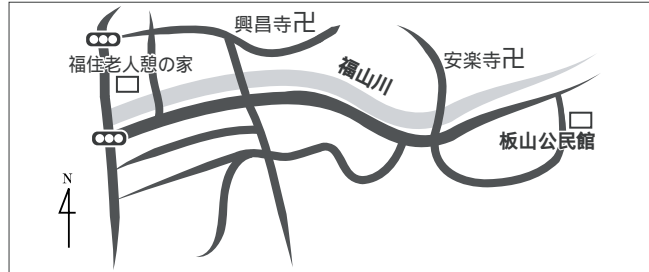


シリーズ

阿久比を歩く ④8



岡戸半蔵木像



『半蔵さ、悪かったのう、一時に嫁さと子を亡くしてしまつて。』
 『ああ、長いこと子に恵まれななで、待ちこがれておつたに、かかも子も、いっしょに死んじまうとは……』
 福住の半蔵さんは、よくよく幸せの薄い星の下に生まれたものだと思ひました。欲も徳もなくして、荒古の阿弥陀堂に涙のお籠りをする日が続きました。見かねた庄屋の義平さんは、そんなに一つ所に伏せ籠つておつては命を失つてしまつ。妻子の菩提を弔うために各地の寺々へお参りに出かけてはどうかとすすめてくれました。阿久比の昔話 半蔵の発心から。

知多四国八十八カ所霊場三開山の

一人、福住出身岡戸半蔵ゆかりの地を訪ねた。
 岡戸半蔵は亡くなった妻子をとむらうために諸国巡礼の旅に出る。文政二(一八一九)年に古見(知多市)妙楽寺の亮山上人と出会う。
 亮山から、文化六(一八〇九)年、弘法大師が夢に現れ「知多の地に札所を開きなさい。協力者として二人の行者を遣わす」と告げられたことを機に、「四国霊場を三度巡つた」と聞かされる。半蔵はその話に感銘を受け、知多四国霊場を開くために亮山と行動を共にする。半蔵は弘法大師の木像などを造るために自分の家屋敷、田畑を売り払い資金を作る。
 その後、讃岐(香川県)の武田安兵衛が加わり、三人で札所勧誘のため、知多半島の寺を巡る。文政七(一八二四)年に知多四国八十八カ所の制定を完了する。
 弥生三月の暖かい陽ざしを受けながら、福住荒古の畑で土を耕すおばあさんがいたので声を掛けてみた。額にはうっすらと汗。年を聞くと七

十八歳だという。「この辺りに岡戸半蔵が物思いにふけたと言われる阿弥陀堂がありましたか」と私たちが聞くと、県道を指差して「この道の少し北に行ったところにあつてね、道を広げるときに無くなつてしまつたよ。私が子どものころは、毎月十二日に村の人が集まり、大数珠を回しながら百万遍を唱えたんだよ。だんごを食べるのが毎回楽しみだったかな。半蔵さんの噂はその時によく聞きましたよ。そこにあつた半蔵さんの像は興昌寺手前の堂に移つたよ」と話してくれた。
 岡戸半蔵木像がまつられる知多四国第十四番札所、興昌寺行者堂の前に立つ。後ろから白装束の年配グループが近寄る。弘法参りをするために山門の石段を上つて行く。友人が「皆さんが通り過ぎて行くときに半蔵さんが笑つたような気がしたんですよ。札所にみんなが来てくれることがうれしいからですかね」と話し掛ける。「君、なかなかうまいことを言つね。半蔵さんの苦労からすれば、きつとうれしくて涙も出るかもよ」と私が鼻をすすりながら答える。「もしかして、今の話で胸が熱くなつたんですか」「うっん。花粉症」。知多路の春は弘法参りで始まるというが、私の春は今年も花粉症から始まつた。
 「伝説の地を歩く」は今回で終了します。次回からは「阿久比の道を行く」を連載します。